

## 新刊紹介

アルジェリアには30%から40%のベルベル人（正式にはアマズィグ人）が住んでいますが、フランス植民地期から今日に至るまでアルジェリア政府にとってベルベル問題はタブーではありませんが、非常に微妙なテーマとなっています。従ってアルジェリア人が、ベルベル人をテーマとした研究に正面から取り組むことは難しいと言えます。

しかしベルベル人とは何者なのか、いかなる思想や文化を有しているのか、という問題は植民地期からフランス人研究者の強い関心を引くテーマでした。最近、筆者（と二人の共訳者）が翻訳・出版した下記の書は、ベルベル人の言語や歴史から、思想や文明の問題にまで言及した非常に優れた書ですのでその紹介をいたします。詳しい内容については本書をお読みください。

私市正年/白谷望/野口舞子訳『ベルベル人——歴史・思想・文明』（白水社・文庫クセジュ、2021年10月、1200円＋税）

本書は、Jean Servier, *Les Berbères*, 6<sup>e</sup> édition（《Que sais-je ?》n° 718, 2017）の翻訳である。フランスはマグリブ植民地政策においてベルベル人とアラブ人の分断化政策をとり、植民地期以降、ベルベル人を優先的に労働者としてフランスに送り込み、独立後もベルベル系移民の流れは続いた。そのため20世紀の半ば過ぎまでフランスにおけるマグリブ系移民の大半はベルベル人であった。20世紀の前半からカビリー系ベルベル人が、20世紀半ば以降はモロッコのスース地方出身のベルベル人がこれに次いだ。今日ではフランス在住のベルベル人は、150万人から200万人と言われる（INALCO, Centre de Recherche Berbère）。彼らの中には単純労働者だけでなく、音楽や文化の分野で活動したり、大学等の研究機関で働いたりする者も少なくない。彼らの多くはフランス国籍を有しているが、ベルベル・アイデンティティを保持しており、それがフランス社会におけるベルベル問題への強い関心の背景となっている。

### （1）著者について

著者ジャン・セルヴィエはフランス植民地期の1918年、アルジェリアのコンスタンティーヌで生まれた。父親アンドレ・セルヴィエは、コンスタンティーヌで発行されていた新聞（*La Dépêche de Constantine*）の編集長の職にあったが、イスラームやアラブ問題の学術研究にも関心をよせ、イブン・イスハークの『預言者伝』やマグリブの生活習慣、エジプトやアルジェリアのナショナリズム運動などについて研究成果を残した。

著者は、大学はパリのソルボンヌに進学し、民族学を学んだ。第二次大戦ではフランス軍志願兵として参戦している。1949年から1955年までアルジェリアを中心にマグリブ地域のベルベル社会の現地調査を行い、また1950年から1957年までC.N.R.S.（国立科学研究センター）の研究員として従事した。その後、モンペリエ大学人文学部教授として社会学と民族学の講義を担当、学部長もつとめた。2000年5月1日、没。

彼がアルジェリアのオーレス地方で聞き取り調査を行っていたとき、1954年11月1日、アルジェリア独立戦争が勃発した。オーレス地方は、アルジェリア人の武装闘争の発火点であった。彼は、軍の指揮官としてテロの被害にあったフランス人の救援活動にかけつけ、またその後、フランス領アルジェリアの防衛のために従軍しているようにアルジェリアには特別の思い出があったようである。

学位論文は、カビリー地域の農民たちの儀礼と象徴に関する研究（1955年学位取得）で、1962年『歳月の門戸』*Les Portes de l'année* という題名で Robert Laffont 社から出版され、1985年『ベルベルの伝統と文明』*Tradition et civilisation berbères* という題名で Le Rocher 社から再版されている。彼は民族学的研究の中心に「伝統的諸文明」という概念をおき、方法論的には民族的、経済的還元主義に反対し、伝統的諸社会の人間の思想と行動を、物事に意味を与える神話や儀礼、象徴を介して分析し、明らかにした。

## （2）本書の内容について

本書は、ベルベル人（公式にはアマズィグ）についての知の総合化を試みた書である。以下、本書の概要を紹介します。

「日没の島」ジャズィーラ・トゥル・マグリブ、として表現されるマグリブの地の最古の住民、ベルベル人は、この地の歴史の経糸となってきた民族である。アウグスティヌスやイブン・ハルドゥーンは、ベルベル人をカナン人の子孫と考えているが、そう断言することは難しい。というよりも、彼らは、穀物栽培の文明を共有する、様々な文明圏からやって来た多様な集団——エジプト人、エーゲ海人、リビア人、フェニキア人、ポエニ（カルタゴ）人、地中海の島々の民、ローマ人など——の生き残りであり、さらにイラン高原から移住してきた遊牧民の痕跡でもあった。しかしこの一見、ばらばらな人びとからなるベルベル人の世界には地中海文明の継承者としての深い統一性が見いだされる。

彼らは、フェニキア、ローマ、アラブ、トルコ、フランスといった侵入者に対し、山岳地に逃げ、反乱を企て、また再結集をした。それが今日のベルベル系住民の主な居住地となっている。

ベルベル語の起源はフェニキア・ポエニ語と考えられるが、互いの理解が困難な程、方言差が大きく、共通の言語的統一性を欠き、書き言葉もなかったために、アラビア語やフランス語が入ってくると両言語の役割が増した。

しかし、言語と文化は一致しないのが普通であり、言語的統一性がなくとも文化的統一性は確立しうる。すなわちベルベル人たちの統一性を確立させているものは、現世においても来世においても、クランを重視し、その上に築かれた「ベルベル思想の不変要素」である。死者は、墓の守護者として生者を守っているのである。死者と生者という相対立する二つの要素が補完的に結合するという思想は、地中海文明の古い二元論である。永遠に対立する二つの原理が、補完的に結合することによって統一性が生まれる、という思想である。二元論はさまざまな社会組織や政治組織の中に見出

される。例えば、家庭は、光としての男と闇としての女の補完関係によって築かれる。部族や村は、高地のソフ（部族同盟）と低地のソフに分けられ、両者が対立と補完関係を有すること、人間の身体には、二つの精神——植物精神「ナフス」と、不可視な者から与えられる鋭敏な精神「ルーフ」——が一对のものとして宿っていることなどである。

ベルベル思想の不変要素は次のようにも説明される。復讐の共同体として認められた家族、クラン、都市、そして部族は、ジャマーア（家族やテントの集合組織）による様々な禁止事項の設定によって秩序を保っていること、女性は市場や労働から排除されるが、家の大黒柱であり、フルマ（聖域性、庇護領域）を有し、さらに反乱の指導者として役割をはたすこと、精神世界を物質世界よりも上に置く、精神性優位の思想は、ベルベル人を、ドナトゥス派の支持、ハワーリジュ派やスーフイー伝道師の歓迎、マフディー（救世主）の希求、アラブの諸王朝の華美な生活に対する激しい非難へと向かわせたことなど。また歌、服装、住宅、季節と食事の関係などに見える文化的、芸術的オリジナリティーも指摘される。最後に、著者は古代の地中海世界に築かれたベルベル思想（と文明）は絶えることなく持続するであろう、と述べて本書の結びとしている。

以上のように本書は、言語学、考古学、歴史学、民族学、社会学、建築学、芸術や食文化、服飾など多様な側面から論じた、ベルベル人に関する知識の総合的分析である。ベルベル文明を地中海世界の中に位置づけ、その古代から継承された「伝統的社会」の物事に隠れた神話や儀礼、象徴の分析によって、ベルベル人の思想・行動・文明の統一性と不変性を明らかにした書と言えよう。

ベルベル人の民族的形成過程を、ギリシア語やラテン語史料を参照しながらこれ程、詳細に分析した書は他にないでしょう。またベルベルの思想を「文明」として位置付ける視点も注目をひきます。本書は、アルジェリアの社会を深いところで考えようとするときに様々なアイデアを提起してくれます。ぜひ、ご一読をおすすめします。

私市正年